

脇坂 裕一・よしみ 夫妻（新潟県阿賀野市）



脇坂夫妻

・平成16年に家族経営協定を締結、平成25年に法人化し「株式会社 脇坂園芸」を設立、認定農業者となる。

・平成27年、加工直売施設「Soel」を開店。生だけではなくドライのエディブルフラワー製造や加工品（紅茶、塩、米粉スイーツ等）を商品化し、事業を拡大。

・全国の商談会によしみ氏の花ソムリエ、エディブルフラワーコーディネーターの資格を活かして出展し、レストランや飲食店等の販路を開拓。フードメッセinにいがた2018にて6次産業化大賞の日本食料新聞社賞を受賞したことをきっかけに、ドライエディブルフラワーの海外輸出を開始し、さらなる経営発展に取り組む。

・阿賀野市内の福祉事業所に輸出用ドライエディブルフラワー製造を委託。多様な人材が活躍できる環境を整備し、障がい者の期間雇用につなげる地域に先駆けた農福連携に取り組む。

・女性従業員の意見を取り入れてメインターゲットの女性消費者を意識した商品づくりを心掛けている。多数の女性従業員を雇用し、農業大学校生には農業指導、子育て世代には柔軟な就業時間を認める等、従業員が働きやすい環境づくりを行っている。



加工直売施設「Soel」

・昭和58年、裕一氏は、水稻兼業の自家に就農し、農業研修先で学んだ鑑賞用花の栽培を始める。よしみ氏は、結婚を機に就農し、農業に従事しながら地域活動や農産物加工技術の習得を始める。

・平成23年、東日本大震災が起こり、復興支援隊に参加したところ、農家であるのに生きるために必要な生活物資を提供できず、見るだけでなく食べることができる花を作ろうと考え、新潟県で初めてのエディブルフラワー（食用花）の生産を始める。



ハウスで栽培しているエディブルフラワー



サラダにエディブルフラワーを添えて

・女性の新規就農にむけた相談者も多く、インターンシップの受入や地域の農業者とのつながりの場を創出するなど、農業後継者の育成に貢献。

・令和5年、裕一氏は「日本エディブルフラワー協会」の理事に就任。よしみ氏は、農村地域生活アドバイザーで役職を兼任し、県全体の農福連携の推進や地域振興活動に尽力。

上野 達也・和枝 夫妻（富山県氷見市）



上野夫妻

ふらり

・平成16年、「café風楽里」を開店し、ブルーベリーを中心とした飲み物やスイーツの提供、生果実や加工品の製造販売に取り組む。消費者と生産者との交流促進の取組実績が評価され、平成24年に富山県農業振興賞を、平成28年から5年連続で氷見市チャンピオンショップコンテストを受賞し殿堂入りを果たす等、地域農業の発展に貢献。

・平成20年、家族経営協定を締結し、氷見市第1号の夫婦共同申請による認定農業者となった。達也氏は農園全般と経理、和枝氏はカフェ経営と加工事業と役割分担を明確にする。夫妻は、前職の旅行会社勤務経験を活かして事業を展開し、経営発展している。



・平成10年、観光的な農業をやりたい思いから、自営農業するため、達也氏は生まれ故郷の氷見市触坂へUターン、和枝氏は福島県郡山市出身からのUターンで新規就農。摘み取り園として展開できるブルーベリーに着目し、富山県で初めて本格的な生産に取り組む。

・石川県能登町で研修を受け、平成13年4月に氷見市触坂の休耕田を活用した農園「いなかふれさか」を設立。現在は面積90a、約1,000本、37品種を栽培。



ブルーベリー

・ブルーベリーの生産、観光農園、加工、カフェと経営が発展したUJターン農業の模範となり、多くの新規就農者や女性起業家が視察や相談に訪れる。カフェを起点とした移住希望者と地元の人との集いの場を提供し地域活性化に貢献。

・令和4年に休耕田でカボチャを作る「触坂パンプキン愛」を結成し、触坂地区の耕作放棄地対策を実施。

・「れんげの会」（高岡広域の若い女性農業者で構成する組織）の会長を務める他、令和5年4月設立した氷見市農業みらい塾（市内認定農業者等で構成される団体）の副塾長に就任、同年7月からは氷見市の女性農業委員に就任。

「Café 風楽里」の外観（上）

カフェで提供しているブルーベリーメニュー（左）
ブルーベリー加工品（右）

小林 二伊奈 氏（石川県金沢市）



小林氏とブロッコリー

・両親の高齢化に伴い、夫妻が経営を継承し、従業員を雇用。20代前半の女性従業員を雇用する際に、働き方について話し合い、「色々な作業をやってみたい」「残業がない・固定休日がある」等の柔軟な働き方をしたいと希望を聞き取り、従業員目線で働きやすい環境改善に取り組む。

・従来は水稻、すいか、ブロッコリー、もち加工が基幹部門であったが、女性従業員を雇用したことを契機に葉菜類、花き部門を導入し冬期も作業している。女性でも身体的な負担が少なく、経営面でも作期が分散でき、性別に関係なく周年で働きやすい環境づくりを実践。

・農業高校、農業短期大学を卒業し、官公庁の農業研究機関に就職。専業農家に嫁いだことをきっかけに就農。平成16年、子供が保育所に通い始め、農業に本格的に従事するタイミングで、家族経営協定を締結し、育児と農業が両立できるよう役割分担する。

・地域では、男性の補助作業が女性の役割という慣習があり、機械に頼らない補助作業をするため、身体を痛める先輩女性農業者が多くいた。地域から請け負う圃場面積が年々増加したことから、作業の中、効率化を図るため、乗用機械オペレーターの練習を始める。現場作業を家族内でローテーションできるようになり、同じ作業を繰り返すことが起因となる身体的な負担が軽減できた。専業農家の一員として、役割分担を見直し、家族全員が健康に働くことができる作業体系へと環境改善に取り組む。



フリージア（エアリーフロラ）の花（左）と栽培の様子（右）

・金沢市内の女性農業者グループ「金沢農女（ノマジヨ・カナザワ）」の設立に発起人として尽力し、初代会長（平成31～令和5年）を務める。隣県の農業女子との交流や勉強会、地域ごとの取組等、女性農業者が活躍できる農業の実現に向けて活動。

・近年は、石川県及び金沢市の農業に関する重要な役職に複数就いており、女性農業者の立場に加えて農業の担い手の立場から、地域の農業振興の方針や農村女性の社会参画に携わっている。また、石川県仕事探しシェルパとして中・高校生に対して職業講話を行い、仕事としての大変さも含めた農家の思いを伝えている。



かきもち

長田 奈津子 氏（福井県あわら市）



長田氏

・農業を志し福井県に移住。平成19年に農家に嫁ぎ、100年以上前から続く農家の一員となる。家族経営協定を締結し、就業条件や役割、収益配分を見直したことをきっかけに、家族で農業経営改善計画の共同申請を行う。

・共同経営者として、農作業全般、経営管理、情報発信を担当し、農業経営の発展に貢献。より品質の高い、おいしい野菜や米づくりを目指し、水稻、メロン、スイカ、トマト、大根、人参を生産。

・農業を始めようとインターネットで情報収集して研修先を見つけた経験から、新規就農者に向けて福井県でリアルに起きている農作業を伝えたいと思い、平成28年からfacebook、令和3年からInstagramを活用した農作業の日誌をつけ、農作業の取組状況を情報発信する。

・平成29年から長田農園ブランドづくりを意識し、オリジナルロゴや生産品目を印刷した直販パッケージを作成。農園紹介のリーフレットや農作業の近況をまとめた定期通信が消費者とつながるきっかけとなり、主な販売先は固定客となっている。



マルセイユメロン（上）
大玉すいか（下）



オリジナル直販パッケージ（上）
と出荷の様子（下）

・女性新規就農者や子育て世代の新規就農者のアドバイザーを務める。中学校の社会科授業や職場体験等の受け入れ、福井県立大学の特任講師として活動し、次世代の農業者育成に広く貢献。また、地元の若手女性農業者グループの代表を務めた他、県域の女性農業者グループ活動に参加し、地域を代表する女性農業者として活躍し、地域の農業振興に係る活動に参画。

・令和元年から3年間、あわら市の農業委員を務め、農業後継者の育成と遊休農地の利用促進が重要であることを実感。県内で最初に里親農家の活動を始めた農家の後継者として役割を引き継ぎ、ふくい園芸カレッジ研修生や就農希望者の受け入れ等、農業後継者の育成に積極的に取り組む。



里親農家の活動の様子